「分かっちゃいるけどやめられない」

一匹のサソリが川岸を歩いていました。「向こうの岸に渡れるようなところはないか」と探していたのです。そこにカエルが現れました。サソリはカエルに「俺をおぶって向こう岸まで連れて行ってくれないか」と頼みます。するとカエルは言います。「冗談だろう。途中でお前は俺を刺すに違いない。そうしたら俺は溺れてしまう」サソリはこう言い返しました。「何て理屈の通らない言い草だ。君が死んだら、俺まで溺れてしまうじゃないか」カエルは納得し、サソリを背負って川を渡りはじめました。ところが川の真ん中で、カエルは背中に鋭い痛みを感じました。「どうして刺した！ お前も溺れてしまうのに！」。カエルはサソリと一緒に沈みながら叫びました。するとサソリは言いました。「分かってはいるけどやめられない。それが俺の性なんだ」

近年、地球温暖化とそれに伴う異常気象や戦争・核兵器使用の危機等 地球が悲鳴をあげているように感じます。

この話を、サソリが人間、カエルが地球と例えるとします。地球がなくなってしまったら、人間も絶滅してしまいます。普通に考えればそんなことは分かっていますし、人間は地球を壊すようなことはしないはずです。しかし、人間は地球を痛めつけ、破壊しています。壊れていく地球が人間に問いかけています。「どうしてこんなことをしたんだ。お前たちには分からないのか？」人間は答えます。「分かっちゃいるけどやめられない。それが人間だから」と。

この「分かっちゃいるけどやめられない」というフレーズは数十年前、クレージーキャッツが歌った「スーダラ節」の一節です。そのメンバーの植木等さんは、浄土真宗のお寺の生まれで、この歌の感想を住職の父親に聞いた時、「親鸞聖人が、我が身を顧みられたような歌だ。」と言われたそうです。このフレーズは、一見すると自己中心的な言葉に聞こえます。しかし、そんな私を、救いの目当てとして働いてくださっている阿弥陀さまのご本願に気付かされた時に、「分かっちゃいるけどやめられない」なかで、「おはずかしいことです、ありがとうございます」と報恩感謝のお念仏申させて頂くことです。